

# 農村景観応援団

## からのメッセージ

「農」と歩む景観とともに、  
地域の魅力を伝える

「農」と歩む景観とともに、地域の魅力を伝えることに対して、農村景観応援団からのメッセージを紹介します。

同じ課題に対して、皆様からのメッセージをお待ちしています。

われわれ「農村景観応援団」は、美しい日本の景観の大切さを多くの方に伝え、「美の里づくり」を広く呼びかけていくべく、分野を超えて強い思いを有するものの集まりです。

志を同じくする専門家の方々の参加を得ながら、美しい農村景観づくりを応援したいと思います。

このパンフレットを通じて、読者の方々に農村の景観について今一度思いを寄せていただき、身近なところから見つめ直していただくきっかけになればと思います。



進士 五十八  
(しんじ いそや)

東京農業大学地域環境科学部教授  
[景観政策、ルーラル・ランドスケープデザイン]

日本の名所、美しい場所は昔から人々に親しまれてきた。日本三景、伊勢神宮、二見ヶ浦など、誰もが生涯一度は訪ねたいと思ってきた。そういう場所は、名所図会や絵葉書としてその景観が広く知られてきた。そのとき大切なのは、画面のなかに人事（人物もしくは人の気配を感じられる家、田畑、祭事など）が描かれていることである。ただ、大自然の山や海だけではない。「景観」の魅力にとって重要なのは、人間との関係の有無である。正にその点に、「農」の風景、農業農村の景観の魅力の根源がある。幾代にもわたる農民らの汗と働きかけとの結果もたらされた田園自然、二次自然、文化的自然、すなわち農業生産・農民生活の統合的表現である「文化的景観（カルチュラル・ランドスケープ）」が「農」の風景の特質であるからである。「農」にかかわる自然・農業・歴史・文化・生活の景観的統合像が、「農」の風景であり、それが「農村」の魅力というものである。



生源寺 眞一  
(しやうげんじ しんいち)

東京大学大学院農学生命科学研究科教授  
[農業経済]

明瞭な四季は日本の宝物です。桜前線の北上に春の訪れを実感し、紅葉のニュースに秋の深まりを想うのが私たちの習いです。野菜や果物など、農産物にも旬があります。季節ごとに衣食住のモードを切り替えるライフスタイルは、よその国からみれば相当にユニークなのです。

東南アジアの国々には、熱帯作物の栽培や米の多回作が可能な豊穡な風土はあるものの、変化に乏しい点は否めません。日本の農村には春夏秋冬それぞれの発見があります。

ゆっくりと、時には一夜にして表情を変える農村景観を満喫できるのは、この国に住む私たちの特権です。



金田 章裕  
(きんだ あきひろ)

人間文化研究機構 機構長  
[人文地理、歴史地理]

農業は、一定の環境に適した形で営まれるが、同時に農業が環境を維持し、保全する役割を持っている。

環境は、殆どが景観として目に見える形で存在するといってもよい。

言い換えるとすれば、農業は景観の大きな要素であり、農業の魅力と景観の魅力は不既不離のものであろう。地域を自覚する時に、同時に農業を認識することになると思われる。

安全・安心の食品、生産者・生産地のはっきりした農作物なども魅力ある景観と共にあって、一層その意義が大きく、また意味のあるものとなろう。景観は農業にとっても、重要な役割を果たす。



藤本 信義  
(ふじもと のぶよし)

宇都宮大学名誉教授  
[建築計画、地域計画]

都市と農村の基本的な違いは、産業構造にあります。この違いは、土地利用のあり方に反映して、都市景観と農村景観のそれぞれを特徴づけています。

農村景観は、農林業的土地利用を前提とする景観ですから、広大な自然の中にあるゴルフ場、基地、リゾート地などは「農」と歩む景観とは言えません。

農村の魅力は、四季の変化を敏感に示す農林業景観と周りの自然、集落などとの取り合わせにあることに留意したいものです。農林業と農的暮らしの豊かさが、農村景観の素晴らしさに直結しています。



野中 和雄  
(のなか かずお)

中山間地域フォーラム副会長、  
食・農・水・里コンシェルジュ [農山村振興]

昨今の世界的な穀物価格の変動や経済不況の中で、市場原理優先の考え方への反省などから、農業や農山村が見直されてきています。こうした風潮に安易な期待を抱くべきではないと思いますが、安全な食料の安定供給、やすらぎを感じる美しい原風景の保全、スローライフの実践などに大きな役割を果たしてきた農山村の魅力をより多くの人に再認識してもらいたい機会であることは間違いありません。

改めて地域の資源や魅力を見つめなおし、皆で知恵を出し合い、自信を持って、都市へ、さらに世界へ、情報発信をしようではありませんか。



田口 敦子  
(たぐち あつこ)

多摩美術大学美術学部教授  
[グラフィックデザイン、環境色彩]

近年、農村景観では「花の風景」による景観創出の取り組みが広がっています。

農村の活性化を目標に掲げ、都市の人々が訪れる魅力的な景観を造ろうという意気込みが見られます。そこで「花の風景」を見る人々のために交通網の整備や休息・食事場所の整備をしておく等、都市型施設が必要になってきますが、これらの都市型施設が形作る周辺景観がどうあるべきか予め考えておき、ガイドラインやデザインコードを造ることも必要になります。とはいえ、農村景観の魅力である気候風土と直結した地域性の保全や、農産物の生産の場において、作業を阻害することがないように配慮することは、農村の都市化が進められる際の前提となることは当然です。



横張 真  
(よこはり まこと)

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授  
[緑地環境計画]

先日、景観保全のお手伝いをしている集落の方々と懇親の機会があった。

その折り、その場に集まった方のひとりが、地元の小学校で子供達を前に、集落の景観について話す機会があり、話を聞き子供達の目が輝いていたと、楽しそうに話してくださいました。

景観を保全することは、目に見える姿を整えることであるとともに、より本質的には、地域を大切にしている人々の気持ちや日々の営みが結果として姿に表現され、それが世代を越えて継承されることでもある。親世代が集落の景観を熱く語り、子供達が目を輝かせて聞き入る。

あの集落における景観保全もいよいよ本質に近づいてきたと、感銘を受けた瞬間だった。



山本 徳司  
(やまもと とくじ)

農村工学研究所農村環境部景観整備研究室長 [住民参加による地域づくり]

「農業そのものが危うい中で、景観なんぞ考えられるか。」と言われる方がいる。本当にそうなのか。農村景観は農業と農の暮らしを映し出す鏡であるはずだ。だから、農業が苦しいのなら景観も苦しいはずだ。

しかし、苦しい今だからこそ、その苦しさを表象している景観を見つめ直すべきなのだ。先祖が長年にわたって営々と築いてきた景観はそう簡単に疲弊しはしない。悲鳴も聞こえるだろうが、「まだまだやれるぞ。」とも景観は応えてくれるだろう。その自信に満ちた地域の魅力を景観に感じたなら、まずは、我が子に、親指を立てて、笑みを送ろう。



宮原 育子  
(みやはら いくこ)

宮城大学事業構想学部教授  
[地域資源を活かした観光振興]

私たちの食を支える「農」近年グリーン・ツーリズムなど農村での交流が盛んになってきました。

来訪者の中には、農業体験や食事、ショッピングの定番メニューだけでなく、地域の自然と歴史や文化、伝統的な産業などを含め、地域をより深く知りたいと思う方が増えています。心癒す農村の景観が何から来ているのか、一方で、厳しい自然と向き合いながらどのように暮らしてきたのか、皆さんの農村の暮らしの歴史は、祖先から受け継いだ知恵の総体であり、その景観が来訪者にとっては地域の魅力となります。

皆さん自身が景観の語り部となってください。